

太陽光使用前自己確認の方法

－ 負荷遮断試験 －

「使用前自主検査及び使用前自己確認の方法の解釈」に基づき、対象となる太陽電池発電所において、設置者による技術基準適合性確認が義務付けられています。

負荷遮断試験では、発電設備出力の1/4負荷運転状態から負荷遮断し、異常のないことを確認した後、順次2/4、3/4、4/4負荷運転まで段階的に試験を行います。発電電圧について過渡変化を記録できる測定器が必要となります。

HIOKIでは負荷試験にも使用できる電源品質アナライザ PQ3100をおすすめします。

※推奨セット：PQ3100-91

(CT7136(600A)×2台、SDメモリカード2GB、携帯用ケースなど同梱)

※商品詳細：https://www.hioki.co.jp/jp/products/detail/?product_key=1651

【試験方法（例）】

1. 本体の設定を行い、測定開始します

SET UPキーを押して「イベント設定1」「イベント設定2」画面を開き、以下の条件で設定を行います。



「スウェル」のしきい値を**110%程度**に設定
「停電」のしきい値を**90%程度**に設定
(それ以外のイベントは**OFF**にします)



「イベント発生前」の波形記録時間を**1sec**に設定
「イベント発生後」の波形記録時間を**10sec**に設定

※イベント発生前波形1sec+イベント発生時波形0.2sec+イベント発生後波形10sec=合計11.2secの波形が保存されます。

※定格電圧に対する過電圧の過渡変化および規定状態（通常は停止あるいは待機状態）へ移行する状態の波形を確認できます。

※また「測定設定1」でVT比やCT比の設定を行うとVT、CTの1次側の値に読み替えることができますので必要に応じて設定してください。

※うまく測定できなかった場合は、「スウェル」「停電」のしきい値設定を変更してください。

2. PCでデータを確認します

負荷遮断を行いイベント記録できたら測定を終了します。

SDカードのデータを本体付属ソフトPQ ONEで解析します。

実効値はトレンドデータの詳細トレンドで確認します。定常時の実効値はスタートイベントのDMM値でも確認できます。負荷遮断後の**過電圧の過渡変化**および**規定状態（ほぼゼロ）になるまでにかかった時間**については、それぞれ、**スウェルイベント**および**停電イベント**のIntrptのイベント波形のカーソル値を確認します。下記は停電イベントの測定例です。

